

天空へのあこがれを

北からの発信

まつり創造



翼が舞い、色鮮やかに気球や凧が踊る。北海道の空の祭り、スカイスポーツフェアが今年もやってきた。

一九八八年に第一回が開催され、十四回を迎えた今年のスカイスポーツフェアはシャケの遡上で有名な石狩市の石狩川河川広場で行われました。

今年もスカイダイビングでオープニングを飾る。ダイバーを乗せた軽飛行機が一万二千フィート(約四〇〇〇M)上空に達する頃には、目を軽飛

行機一点に集中していなければすぐ見失ってしまいます。「大空にダイビングしました」というアウンズの後、「一、二秒たつてからでしようか、豆粒よりも小さい点が青空に浮き、やがてその豆粒は会場上空にカラフルなパフシュートの花を咲かせて降りてきた。

なぜ北海道にスカイスポーツ? 「東京には空がない」と嘆いたのは詩人高村光太郎の妻、智恵子であるが、「北海道には空がある」と喜んだ

のは、スカイスポーツを愛好する人々である。上士幌町の熱気球が大晦日の、往く年「来る年」に毎年のように登場し、滝川市のグライダーによる街おこしも全国に知られたようになった。全国のスカイスポーツ愛好者の多くが夏休みや冬休みを利用して熱気球やグライダー、パラ・ハンググライダー、マイクロフイトブレインの合宿にこの北の大地を訪れている。

北海道開発局の試算では、自由に空を飛ぶことができる北海道の空域は全国の四七%を占めています。

この広い空域こそ北海道の新しい資源で、ここにスカイスポーツの愛好者が集い、道内各地でスカイスポーツを地域振興と結びつける試みが行われてきたのである。

気軽に楽しめるスカイスポーツだから、みんなに参加してほしい。さて、当日は、多くの親子連れが来場してくれた。学校の先生に引率された生徒の、ペットボトルロケット作りや紙飛行機教室を訪ね歩く姿がほほえましい。竹とんぼ教室、ゴム動力飛行機教室では子供たちが年配のおじさんに真剣に飛行機の作り方を教えてもらっているのである。「なぜ、飛行機は空を飛ぶのか?」を教えてくれるのは、航空工学の難しい講座ではありません。空と風と広場があるからだと子供たちは知っている。

午後のメインイベントは、グライダーと軽飛行機の曲技飛行である。四〇〇〇フィート約一二〇〇M上空まで軽飛行機で牽引されたグライダーが上昇し、ワイヤーが切り離される。音楽がスタートし、グライダーが宙返りを繰り返しながら降りてくる。グライダーの吐くスモークが真っ青な空に白い弧を描く。切りもみ、背面、会場にいる万人を超える人々が一様に息を詰めて見とれている。白い翼のグライダーが青空を背景にして



舞っている姿は実に美しいパイロットはグライダー歴一五年をこえるベテランで、オーストリアにグライダー留学の経歴をもつ加藤隆士氏である。宙返りのときにパイロットが受ける重力は4Gと言われている。

スカイスポーツは誰でも気軽に参加できる空のスポーツであるとともに、追求すればどこまでも奥が深く美しいスポーツであることを教ええられる。

スカイスポーツは空と水と陸を結びつける広場。山の頂上から離陸するパラグライダーやハンググライダー、大平原をゆっくりと上昇し静かな風とともに移動する熱気球、ちよとした広場でも簡単に離陸するマイクロライトプレーン(超小型の飛行機)、技術の粋を尽くして自由自在に操れる模型飛行機などスカイスポーツは多種多様である。

屈斜路湖を見下ろしながら、美幌峠や津別峠から飛び「エ」の丘陵田園地帯を眺めながら留寿都やモコアンヌブリから飛び立つたパラグライダーやハンググライダーが空中散歩を楽しむ。十勝やオホーツク、根釧の雄大な大平原では、夏も冬も何一〇機もの熱気球が無限の天空に所狭しと一斉に駆け上がる。

こうしたスカイスポーツが北海道の雄大な自然と大空の中で見ることができるとはうれしい限りである。近年は、地域住民がもと身近にスカイスポーツに触れ合い、参加できるようにと、スカイスポーツの専用広場である航空公園が各地で整備されてきている。特に北海道の広い河川敷を利用した航空公園は、市民や観光客の体験搭乗の場となっており、気軽にスカイスポーツを楽しむことができる。また、家族連れで訪れても、楽しめるように遊歩道やサイクリングロード、観覧護岸や簡易遊具などが整備されている。グライダーで有名な滝川市の航空公園は

航空動態博物館(スカイミュージアム)があり、実際に乗ることができるグライダーが何機も格納展示されている。

北海道のスカイスポーツは、新しい世紀に入っても雄大な自然と大空を舞台として、空の魅力を全国に発信し、全国の人々と交流できるコミュニケーションツールとなることを追いつめられているのである。

日本に北海道がある限り、北海道に空がある限り・・・さて、当日のスカイスポーツフェアも日がたむきかけてきた頃、模型飛行機の演技で終了に近づいてきた。

凧や紙飛行機を片手に持ち、もう一方の手をお母さんやお父さんの手につないで会場を去っていく親子連れの列。その中から私のところに急ぎ足で駆け寄ってきた親子がいた。「これから道東の方へ行くのですが、スカイスポーツを見られるところはありますか?」。親子で夏休みを利用して北海道旅行をしているとのこと。私は、スカイスポーツフェアのガイドブックを開けて、スカイスポーツイベントカレンダーの中から、八月二日から五日にかけて、上士幌町で北海道ハルーンフェスティバルが開かれます」と教えてあげた。

北海道では一年間に四〇もの空の祭りが開催される。スカイスポーツフェアはそのオープニングだ。

北海道に空がある限り、スカイスポーツを通じた全国、世界への発信と交流が広がっていくのである。

社団法人北海道スカイスポーツ協会

常務理事 大宮 晃一

